

# 琉球大学学術リポジトリ

## 英語における「声の同化」について

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-12-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石原, 昌英 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002002300">https://doi.org/10.24564/0002002300</a>

## 英語における「声の同化」について

石原 昌英

### 0. はじめに

Chomsky and Halle (1968) の *The Sound Pattern of English (SPE)* に代表される初期の生成音韻論では分節音は素性の束から構成され、その素性は全て二項対立的 (binary) で、 $/+ / か / - /$  で指定された。近年では、 $[-F]$  と指定された一部の素性が音韻レベルではまったく機能しないので、このような素性は音韻レベルでは存在しないと主張されるようになった。つまり、存在しないのであるから機能しないのである。例えば、素性階層理論が提唱されて、 $[\text{coronal}]$  は二項対立的素性ではなく、一価的 (monovalent / privative / unary) 素性であるとみなされるようになり、 $/+ / か / - /$  で指定される必要のない節点として機能するようになった。<sup>1</sup> これは  $[-\text{coronal}]$  が音韻レベルで機能しないので、この素性を設定する必要がないというのが理由である。この流れの一つに、Mester and Itô (1989) 等が提唱する  $[\text{voiced}]$  素性は二項対立的ではなく、一価的であるという主張がある。本稿ではこの主張に反論し、 $[\text{voiced}]$  素性は二項対立的であることを論ずる。まず一価的  $[\text{voiced}]$  素性という概念が提唱された理由を素描し、それを支持する議論を述べる。次に、英語の音韻現象を分析し、この一価的  $[\text{voiced}]$  素性を前提とすると解決できない問題があることを示し、 $[\text{voiced}]$  素性が二項対立的であることを論ずる。そして、 $[\text{voiced}]$  素性が二項対立的であることを前提として、英語における声の同化を分析する。

### 1. 二つの不完全指定理論

*SPE*によると、分節音の基底形表示では、分節音に独特 (idiosyncratic) な特徴のみがリストされ、予測可能な特徴は派生される。不完全指定とはこの

予測可能性に関する理論で、予測可能な素性あるいは素性指定を規則によって与えようというものである。(Archangeli (1988)を参照。)ところで、不完全指定理論に基づいて分節音を(基底)表示する際には、その分節音に独特な特徴(素性)は何か、また基底形の素性は／＋／で指定されるのかまたは／－／で指定されるのか、つまり、基底形では何が指定され、何が予測可能性により指定されていないのかを決定する必要がある。

例えば [voiced] 素性について見てみよう。共鳴音には無声と有声の区別が無く、共鳴音は [+voiced] のみで指定されるのが普遍的である。したがって、この種の音声については [+voiced] の指定は予測可能である。つまり、基底形では共鳴音の [voiced] 素性に関する指定はなく、余剰規則 (redundant rule) により [+voiced] が挿入される。一方、阻害音には無声と有声の区別があり、基底形の [voiced] 素性は／＋／または／－／で指定される必要がある。言い換えると、何が指定され、何が予測可能性により指定されていないのかを決定する必要がある。このような阻害音の [voiced] 素性の指定に関する問題の解答として二つの主張がある。

一つは、徹底不完全指定 (Radical Underspecification) として知られる主張で、阻害音は基底形で [+voiced] か [-voiced] で指定される。有声音を [+voiced] と指定すると、対立する無声音が [-voiced] で指定されることは予測可能であるので、[-voiced] は指定する必要がなくこのこの指定は欠如規則 (default rule) によってなされるという考え方である。したがって、徹底不完全指定に基づくと阻害音の [voiced] 素性は基底形で(1)のように指定され、／－／は欠如規則によって挿入される。

(1)

阻害音	p	b	f	v	θ	ð	t	d	s	z	ʃ	ʒ	k	g
[voiced]		+		+		+		+		+		+		+

もう一つの主張は、対照的不完全指定 (Contrastive Underspecification)

として知られ、有声阻害音は [+voiced] で、そして無声阻害音は [-voiced] で指定される。阻害音には有声と無声の対立があるので、その対立を生み出す /+ / と /- / の両方が指定されなければならないという考えに基づく。また、基底形において阻害音が有声であるのか無声であるのかは予測不可能な idiosyncratic な特徴であるので /+ / と /- / の両方が指定されなければならないという考えも成り立つ。この主張に基づく阻害音の [voiced] 素性は基底形で (2) のように指定される。

(2)

阻害音	p	b	f	v	θ	ð	t	d	s	z	ʃ	ʒ	k	g
[voiced]	-	+	-	+	-	+	-	+	-	+	-	+	-	+

## 2. [voiced] に関する対照的不完全指定の問題

阻害有声音も阻害無声音も [voiced] 素性に関して指定されなければならないという対照的不完全指定には問題がある。日本語の連濁等に見られるライマンの法則は、義務的曲線の原理 (OCP と略す) に基づき、一つの語の中に同価の素性 ([+voiced]) が隣接することを認めない。

(3) ライマンの法則

\*[[+voiced] [+voiced]]<sub>M</sub>

連濁は複合語の二番目の要素の語頭の (無声) 子音を有声音に変える規則であるが、この法則により、複合語の二番目の要素に有声阻害音が含まれると (4a) に示したように連濁の適用が阻まれる。(Ishihara (1991)、Itô and Mester (1986)、Mester and Itô (1989) 等を参照。)

(4) a.

onna-kotoba (\*onna-gotoba)

b.

onna-gokoro (← kokoro)

baka-sawagi (*baka-zawagi)	ori-gami (← kami)
kami-hubuki (*kami-bubuki)	kuro-zatoo (← satoo)
hitori-tabi (*hitori-dabi)	dooki-duke (← tuke)

徹底不完全指定理論を用いると、onna-kotoba「女ことば」に連濁が適用されないことは次のように表すことができる。/kotoba/の語頭の無声閉鎖音を有声に変えることは OCP の一種であるライマンの法則に違反することになるので、この無声音を有声音に変えることはできない。

(5)

[+vcd]	[+vcd]
onna- g o t o b a	

一方、対照的不完全指定を採用すると [onna-gotoba] が認められることになる。有声阻害音は [+voiced] で、そして無声阻害音は [-voiced] で指定されるので、(6) に示してのように [-voiced] が間にあるので二つの [+voiced] は隣接することにはならない。したがって、OCP (ライマンの法則) の違反は無く、/kotoba/の語頭の無声閉鎖音を有声に変えることは可能である。

(6)

[+vcd]	[-vcd]	[+vcd]
onna- g o t o b a		

### 3. 一価的素性としての [voiced]

上に述べた問題を解決するために、Mester and Itô (1989: 277~282) は [voiced] 素性は、音韻レベルでは、/+/または-/で指定される二項対

立的素性ではなく、素性そのものが存在するか否かが指定される一価的素性であると主張した。<sup>2</sup> この素性の存在が指定されれば、つまり、[voiced]があれば、従来の [+voiced] で指定されたのと同じ特徴を示す。また、この主張の帰結として、[-voiced] は音韻論では存在しないことになり、無声子音は音声レベルで無声音として表出する。<sup>3</sup> この考え方にに基づき、(6) の表示を (7) のように書き換えることができる。この表示が示すように、/kotoba/ の語頭の無声閉鎖音を有聲に変えることにより、二つの [voiced] が隣接し、OCP に違反する構造が派生されることになる。このような構造は認められないので、問題の無声音を有聲音に変えることは不可能で、連濁は適用されない。

(7)

*[vcd]	[vcd]
onna-	g o t o b a

Lombardi (1991, 1995) は一価的 [voiced] 素性を支持して次のような議論をしている。一つは言語普遍的な中立化の特徴である。ドイツ語、オランダ語、ポーランド語等に見られる阻害音の中立化はほとんどが音節末等で有聲音が無聲音になるという現象であり、無聲音が有聲音に変化するという中立化は存在しない。中立化を [voiced] の連結線の切断であると分析すると、[-voiced] が音韻レベルでは存在しないという理由で無声阻害音の有声化は起こり得ないことになる。一価的 [voiced] 素性を支持するもう一つの理由として、音韻レベルにおいて [-voiced] が活性でないことであげられる。つまり、[-voiced] が拡散して、声の同化（無声化）を起こしたり、[-voiced] が音韻規則の表示に含まれないということがないことである。ここでも、音韻レベルでこの素性が存在しないのであれば、音韻規則において [-voiced] が活性でないことは容易に説明がつく。Mester and Itô (1989) によると、英語の複数形や過去形にみられる無声化は [-voiced] の拡散により派生されるものではなく、同一音節内で隣接する阻害音は声が一致しなければならないとい

う制約に基づく現象である。

一価的 [voiced] 素性への反論として、ロシア語やオランダ語に見られる音節を跨いだ無声音化があげられる。しかし、Lombardi (1991) によると、このような無声化は [voiced] 素性の連結線の切断、つまり中立化として分析できるので、一価的 [voiced] 素性に対する反論にはならない。Spencer (1996) で [-voiced] の拡散と分析されたロシア語の指小辞 /-ka/ の付加に伴う無声化を見てみよう。

#### (8) ロシア語の無声化

a. r-ka	[rka]	"fish"
b. golov-ka	[golofka]	"head"
c. vod-ka	[votka]	"water"
d. glaz-ka	[glaska]	"eyes"

従来の二項対立的 [voiced] 素性を前提とすると、これ無声化は接尾辞の子音 /k/ の [-voiced] が拡散により派生されていると分析できるので、他の分析がなければ、一価的 [voiced] 素性への反論となり得る。しかし、この無声化は語幹末の有声阻害音の [voiced] 素性の連結線の切断（中立化）と音声レベルでの [-voiced] の挿入としても分析できる。したがって、一価的 [voiced] 素性への反論とはならない。

#### 4. 一価的 [voiced] 素性への反論：英語

英語の語彙レベルの現象が一価的 [voiced] 素性への反論を提供する。英語では、数は少ないが、名詞を派生する接尾辞 /-tion/ や形容詞を派生する接尾辞 /-tive/ が両唇鼻子音で終わる語幹に付加されると語幹末子音と接尾辞の頭子音の間に無声両唇閉鎖音 /p/ が現れる。次に例を示した。

#### (9)

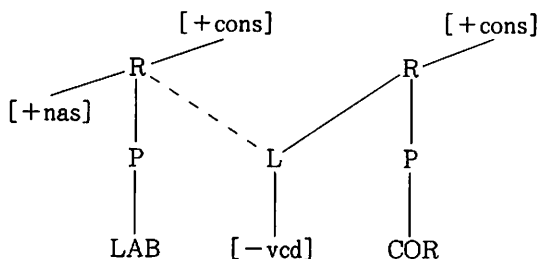
a. assume	assumption	assumptive
-----------	------------	------------

- |    |         |             |             |
|----|---------|-------------|-------------|
| b. | consume | consumption | consumptive |
| c. | presume | presumption | presumptive |
| d. | redeem  | redemption  | redemptive  |
| e. | resume  | resumption  | resumptive  |

ここで、なぜ有声音の /b/ ではなく無声音の /p/ が現れるのか、また歯茎音の /t/ ではなく両唇音の /p/ がなぜ現れるのかを説明しなければならぬ。

この現象は [voiced] 素性が二項対立的であることを前提として説明が可能である。この前提の基に、問題の接尾辞は英語語彙音韻論の Level 1 に属する接辞であるので、この段階で英語の [voiced] 素性は [-voiced] と指定されていると仮定しよう。そしてこの [-voiced] を支配する Laryngeal 節点が (10) に示した規則で鼻子音へ拡散し、<sup>4</sup> その結果 [+nasal, -voiced] という言語一般的に認められない不適格な構造が派生される。<sup>5</sup>

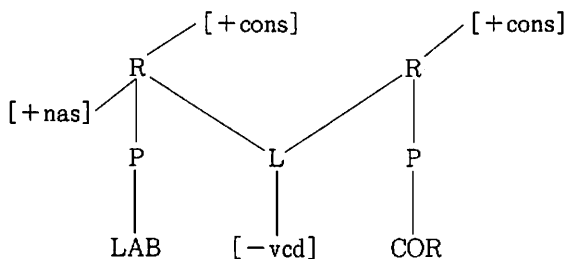
(10) Laryngeal 節点の拡散 (I)



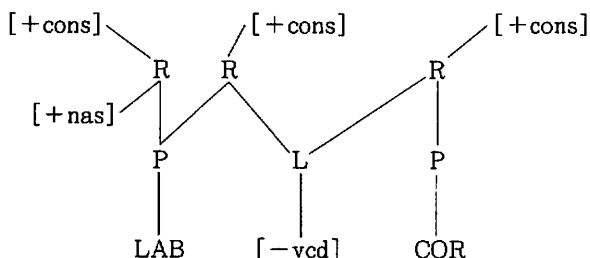
この構造は (11) に示した分割という方法で修正され、その結果 /mp/ という子音連続が現れるのである。(分割による不適格な構造な修正については Calabrese (1988) を参照。)



(11) \* $[+nasal, -voiced]$  の修正 : 分割



⇓



制約に違反する  $[+nasal, -voiced]$  の組み合わせは  $[+nasal]$  と  $[-voiced]$  に分割されるが、 $[-voiced]$  の部分は先行する  $[+nasal]$  の部分（両唇鼻音）と Place 節点を共有し、 $[-continuant]$  が欠如規則により挿入されることになるので、無声両唇閉鎖音として表出することになる。

音韻レベルにおいて  $[-voiced]$  素性が存在（機能）しないという一面的  $[voiced]$  素性を前提とするとこの分析は不可能である。Lombardi (1996) は語彙語音韻レベルでは  $[-voiced]$  素性が機能することもあると論じているが、 $[-voiced]$  はこのレベルまたは音声レベルの段階で挿入されることになる。そうになると、(9) に示して派生名詞 (*redemption*) 及び派生形容詞 (*redemptive*) において、言い換えると語彙（音韻）レベルにおいて、なぜ無声両唇閉鎖音が表出するのかを説明するのは困難であろう。語彙レベルにおいて  $[-voiced]$

が存在することを認めないので、Laryngeal 節点の拡散により [+nasal, -voiced] という言語一般的に認められない不適格な構造が派生されるということもありえないし、分割による不適格な構造の修正もあり得ない。したがって、無声両唇閉鎖音は音韻レベルで挿入されるということになるが、音声レベル（語彙後音韻レベル）まで [-voiced] が付与されないとすると音韻レベルでなぜ無声両唇閉鎖音が派生されるのか説明できない。

この議論から、語彙レベル（つまり音韻論のレベル）において [-voiced] 素性が存在することを前提とした分析が、その存在を認めない分析より優れていることは明らかである。したがって次のことが結論として言える。[voiced] 素性は、音声レベルだけでなく、音韻レベルにおいても二項対立的素性として機能する。言い換えると、（少なくとも英語においては）[voiced] は音韻レベルにおいて一価的素性として機能することはないということになる。

また、一価的 [voiced] 素性は対照的不完全指定理論を前提としているが、一価的 [voiced] 素性が否定されたので、日本語の連濁の分析で論じたように [voiced] 素性は基底形において、[+voiced] か [-voiced] で指定されることになる。言い換えると、徹底不完全指定理論を採用することになる。日本語では [+voiced] で指定される。一方、英語では (9) に例示した派生語が形成される段階（つまり、語彙音韻論のレベル 1 の段階）では [-voiced] で指定されている。このことから英語の基底形においては [voiced] 素性は [-voiced] で指定され、[+voiced] は欠如規則により付与されることになると推察できる。

#### 4. 英語における声の同化

第3節で論じたように、[-voiced] は音韻レベルでも存在し、[voiced] 素性は二項対立的素性として機能する。本節ではこれを前提に英語における声の同化を分析する。英語の語彙レベルで見られる声の一致には (12) と (13) に例示したものがある。

(12) 逆行同化

a) 無声化

describe	description	descriptive
subscribe	subscription	subscriptive
receive	reception	receptive
perceive	perception	perceptive

b) 有声化

wives	baths
leaves	sheaths
wolves	paths

(13) 進行同化

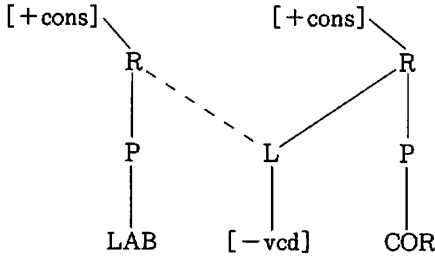
caps	cats	kicks
ropes	sets	decks
cf. tubes	cards	bags
doves	hands	rugs

(12a) に例示された語に付加された接尾辞は英語のレベル 1 の語彙に属し、また、(12b) 及び (13) に例示された付加された接尾辞はレベル 2 の語彙に属する。そこで、次に二つの語彙音韻論レベルにおける声の同化の分析について述べる。

4. 1. レベル 1 音韻論における声の同化

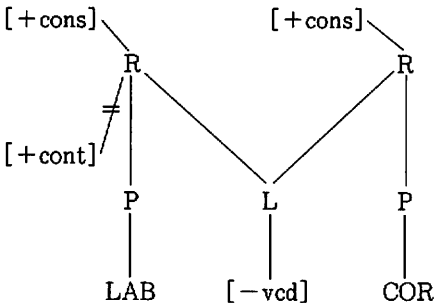
(12a) の無声化については (9) の派生名詞及び派生形容詞と同じ接辞が関係しているので、[-voiced] を支配する Laryngeal 節点の拡散が無声化を引き起こすと分析できる。<sup>6</sup> (14) にその規則を表示する。ここで無声化の標的である有声障害音の [voiced] 素性が [+voiced] として指定されていないのは、この段階では欠如規則による [+voiced] の付与がなされていないからである。

(14) Laryngeal 節点の拡散 (II)



この規則により有声両唇閉鎖音は無声音に変化する。ところで、*receive-reception* の例が示すように語幹が有声唇歯摩擦音で終わる場合には、無声化だけでなく摩擦音の閉鎖音化も起こっている。この閉鎖音化を [+continuant] の切断と後に起こる欠如規則による [-continuant] の挿入によって引き起こされる現象とみなすことができる。しかしながら、[+continuant] の切断がなぜ起こるのかは説明はできない。[+continuant] の切断については次の規則を設定する。(左側の R (oot) 節点と [+continuant] を結ぶ連結線上の [=] は、この連結線が切断されていることを示す。)

(15) [+continuant] 切断



切断された [+continuant] は削除され、音声レベルまたは語彙後音韻論レベ

ルに入る前に、欠如規則によって [-continuant] が付与される。唇歯摩擦音と両唇閉鎖音は音声的には異なる調音点を持つが、 [+continuant] が切断され [-continuant] が付与されることによって、LAB (IAL) 節点と [-continuant] を持つ無声両唇閉鎖音が表出する。

ここで本稿が提唱する分析の優れている点について述べる。それは、-tion と -tive という接尾辞の付加に伴って現れる無声両唇閉鎖音の表出、有声両唇閉鎖音の無声化、有声唇歯摩擦音の無声化・閉鎖音化という三つ現象が [-voiced] を支配する Laryngeal 節点の拡散という一つの規則によって引き起こされると分析できることである。第3節で論じたように、無声両唇閉鎖音はこの拡散の結果起こる不適格な素性の組み合わせを修正する過程で表出する。また、唇歯摩擦音が無声両唇閉鎖音に変化するのもこの拡散が引き起こしていることは明らかである。このことから、レベル1における声の同化には一つの「Laryngeal 節点の拡散」を設定するだけでよいことがわかる。(10)の「Laryngeal 節点の拡散 (I)」では [+nas (al)] が含まれているが、上に述べた理由でその必要はない。つまり、(14)の「Laryngeal 節点の拡散 (II)」がレベル1音韻論における声の同化に関する正しい規則である。この規則が適用され、標的とされた子音に [+nasal] が指定されていると(11)の分割規則が適用される。また、標的とされた子音に [+continuant] が指定されていると、(15)の切断規則が適用される。その結果、両方とも無声両唇閉鎖音が表出する。

#### 4. 2. レベル2音韻論における声の同化

レベル2音韻論においては次に例((12b)及び(13)の再提示)に示されたような声の同化がおこる。

(16)

a) 有声化

wives (wife-s) baths

leaves (leaf-s) sheaths

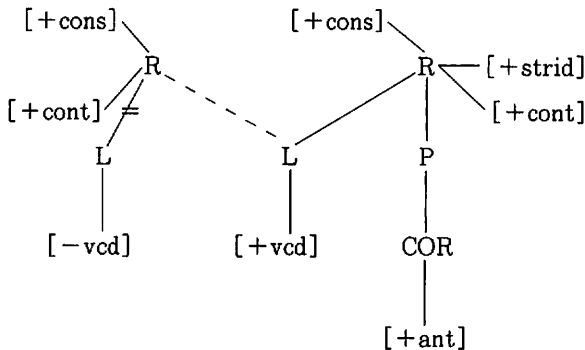
wolves (wolf-s) paths

b) 無声化 (及び有声化)

caps	cats	kicks
ropes	sets	decks
tubes	cards	bags
doves	hands	rugs

有声化を拡散としてみなすとしたら、(16a)において語幹末の無声閉鎖音が有声化していることは、接尾辞からの拡散によるとしか分析できない。このことから、レベル2音韻論においては [+voiced] が存在し、機能していることは明白である。第3節及び前節で論じたように、レベル1音韻論では [-voiced] が指定されているので、[+voiced] はレベル1音韻論では存在しなかったが、レベル2音韻論に移り、有声化が起こる前に欠如規則でこの指定が付与されたことになる。この有声化を引き起こす声の同化には次の規則が設定される。

(17) Laryngeal 節点の拡散 (III)



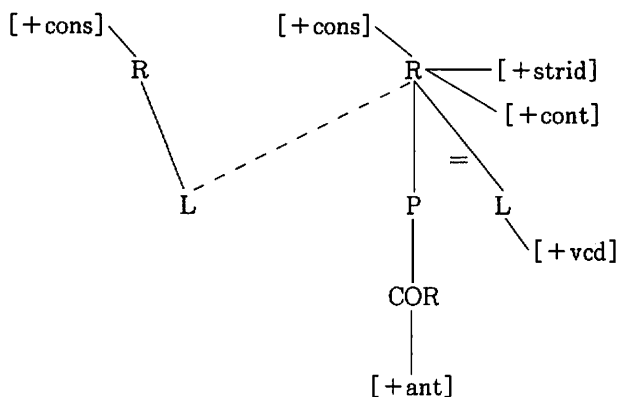
Laryngeal 節点が逆行方向 (左側) に拡散することによって、語幹末の摩擦音が基底形で指定されていた [-voiced] は Laryngeal 節点と共に Root 節点

から切断され、削除されることになる。その結果、語幹末の摩擦音と接尾辞は [+voiced] を支配する Laryngeal 節点を共有することになり、(無声) 摩擦音の有声化がおこる。

(17) の規則に P (lace) 節点が含まれていないのは次の理由による。この有声化は唇歯摩擦音と歯摩擦音の両方におこる。したがって、一つの規則の中に二つの異なる調音点素性を支配する Place 節点を含めることはできない。また、この規則に Place 節点が含まれていないことから、無声歯茎摩擦音 (/s/) と無声硬口蓋摩擦音 (/ʃ/) にも有声化が起こることは可能である。しかしながら、この二つの摩擦音と接尾辞に含まれる摩擦音の間には /ə/ が存在するので、声の同化は起こらない。

次に (16b) に示された声の同化(一致)について述べる。ここでは、表面上は無声化(つまり [-voiced] を支配する Laryngeal 節点の拡散)のみが起こっているように見えるが、Laryngeal 節点は下位の素性の指定に関係なく拡散するとみなす。このほうがより一般性が高い規則となるからである。この声の同化については次の規則を設定する。

(18) Laryngeal 節点の拡散 (IV)



ここでは、Laryngeal 節点は進行方向（右側）に拡散する。拡散の標的となる歯茎摩擦音は二つの [voiced] 素性を持つことができない。拡散してきた節点・素性が優勢なので、基底形で指定されていた [+voiced] は Laryngeal 節点と共に切断され、削除される。ここで左側の Laryngeal 節点が [-voiced] を支配していると接尾辞は無声歯茎摩擦音として表出し、[+voiced] を支配していると有声歯茎摩擦音として表出する。

Mester and Itô (1989) は、音韻レベルにおける [-voiced] の存在を否定し、英語の複数形や過去形の接尾辞にみられる無声化は語幹からの [-voiced] の拡散により派生されるものではなく、同一音節内で隣接する阻害音は声が一致しなければならないという制約に基づく現象であると主張している。しかし、本稿で論じたように、英語においては [-voiced] は音韻レベルでも機能する。したがって、一面的 [voiced] 素性を前提とする Mester and Itô (1989) の主張は妥当性が疑わしくなる。さらに、音韻レベルにおいて同一音節内で隣接する阻害音は声一致しなければならないという制約があるとすれば、有声化ではなく無声化が起こるのはなぜか説明しなければならない。言い換えると、存在しない [-voiced] に声を一致させるために活性の [voiced] 切断することが可能なのか、つまり存在しないものを規則の条件にすることができるのかどうかという根本的な問題が提起される。本稿では、[-voiced] は音韻レベルでも存在することを示し、(16b) に例示された声の同化は Laryngeal 節点が進行方向へ拡散した結果起こる現象であると分析した。この分析には、Mester and Itô (1989) に要求されるような説明は要求されないので、より優れていると言える。

## 5. おわりに

本稿で論じたように、語彙レベルにおいて [-voiced] が存在することを前提とした声の同化（無声化及び有声化）の分析が、[-voiced] が存在しないことを前提とする分析よりも優れている。したがって、[voiced] は一面的素性ではなく二項対立的素性であると結論づけることができる。



## 註

- 1 Clements (1985, 1988)、McCarthy (1988)、Mester (1986)、Sagey (1986)、及び Steriade (1987a, b) 等に一価的素性・節点を支持する議論がある。
- 2 Mester and Itô は一価性の [voiced] 素性は、一価性であるという理由で、徹底的不完全理論より制限的であるので理論的に優れていると主張している。
- 3 Lombardi (1996) は語彙後音韻論の段階では [-voiced] が存在すると論じている。言い換えると、[voiced] が一価的素性として機能するのは語彙音韻論の段階と言うことになる。
- 4 もちろん、[-voiced] が拡散したと分析することも可能であるが、ここではこの素性を支配する Laryngeal 節点が拡散すると分析する。
- 5 ここでは [+sonorant, -voiced] の組み合わせを認めないより一般的な制約に違反すると言ってもよいが、両唇鼻子音のみが関係しているために [+nasal, -voiced] を認めない制約に違反するとしておく。
- 6 本稿では (9) と (12a) の例に見られる接尾辞付加に伴う短母音化には言及しない。(この現象については原口 (1994) 及び Myers (1987) 等を参照のこと。)

参考文献

- Archangeli, D. (1988) "Aspects of Underspecification Theory," *Phonology* 5: 183~207.
- Calabrese, A. (1988) *Towards a Theory of Phonological Alphabets*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Chomsky, N. and M. Halle (1968) *The Sound Pattern of English*. New York: Harper and Row.
- Clements, N. (1985) "The Geometry of Phonological Features," *Phonology Yearbook* 2: 225~252.
- \_\_\_\_\_ (1988) "Towards a Substantive Theory of Feature Specification," *NELS* 18: 79~93.
- 原口庄輔 (1994) 『音韻論 (現代の英語学シリーズ 3)』 開拓社
- Ishihara, M. (1991) *The Lexical Prosodic Phonology of Japanese Verbs*. Ph. D. dissertation, University of Arizona.
- Itô J. and A. Mester (1986) "The Phonology of Voicing in Japanese," *Linguistic Inquiry* 17: 49~73.
- Lombardi, L. (1991) *Laryngeal Features and Laryngeal Neutralization*. Ph. D. dissertation, University of Massachusetts.
- \_\_\_\_\_ (1995) "Laryngeal Neutralization and Syllable Well-Formedness," *Natural Language and Linguistic Theory* 13: 39~74.
- \_\_\_\_\_ (1996) "Postlexical Rules and the Status of Privative Features," *Phonology* 13: 1~38.
- McCarthy, J. (1988) "Feature Geometry and Dependency," ms. University of Massachusetts.
- Mester, A. (1986) *Studies in Tier Structure*. Ph. D. dissertation, University of Massachusetts.
- Mester, A. and J. Itô (1989) "Feature Predictability and Underspecification: Palatal Prosody in Japanese Mimetics," *Language* 65: 258~293.

- Myers, S. (1987) "Vowel Shortening in English," *Natural Language and Linguistic Theory* 5: 485~518.
- Sagey, E. (1986) *The Representation of Features and Relations in Non-Linear Phonology*. Ph. D. dissertation, MIT.
- Spencer, A. (1996) *Phonology*. Oxford, UK: Blackwell Publishers.
- Steriade, D. (1987a) "Redundant Values" *CLS* 23: 339~362.
- \_\_\_\_\_ (1987b) "Locality Conditions and Feature Geometry," *NELS* 17: 595~618.

Summary  
Voicing Assimilation in English  
Masahide Ishihara

This paper presents an argument against the claim made by Mester and Itô (1989) and Lombardi (1991, 1995) that feature [voiced] is privative. Based on an analysis of the appearance of /p/ in words such as *assumption* and *redemption*, I argue that the feature is binary. That is, [-voiced] should be present and active in the lexical phonology of English. I also show that, in addition to the emergence of the voiceless bilabial stop, the leftward spreading of a Laryngeal Node dominating [-voiced] causes devoicing of both /b/ and /v/ as well as despirantization in words like *description* and *reception*. I also argue that devoicing of the plural suffix after a voiceless obstruent is due to a spreading of a Laryngeal Node dominating [-voiced]. It is not due to a constraint which requires a tautosyllabic sequence of obstruents have the same value of the [voiced] feature.